

## 第 134 回 山口西田讀書會

2017.2.25

第 133 回 (2017.1.28) のプロトコル

参加者：佐野教授、谷、日野、青木、山口、藤村、岡田、杉山

岡部さんより西田先生の言われる反省とはどのようなものか、との問いが出された。

反省とは苦悩であり、(動物になくてどうして人間におこるのか…) このことは人間とは何なのかという問いに等しい (佐野教授；以下 Pr.S)。

(一つの答えとして) ~反省が起こるのはさらに一層大なる統一に進むためである~2-9-3 (Pr.S)。

(付) 赤ん坊は始めは樂園にいるが、意識して分別ができると、他人を押しつけて自ら生きんとする・・・すなわち悪が発生する (Pr.S)。

復習として：意識現象と自然現象を統一するものが神で、それらは神の表現である (キリスト教の言うように神が創ったものではない)。神は宇宙の統一者であり、宇宙は神の表現である~ 4-3-5。

(本日分として) 4-3-6 に入る：

精神現象とはいわゆる知情意の作用であって、その(知情意の)背後に一の統一力があり、これらの(精神)現象はその(統一力の)発現である。

神は実在であり統一しているものは真の自己である。その真の自己の人格を知れと西田先生はいわれ、それこそがすなわち神「人格神」と同一である (Pr.S)。

今、この(意識の)統一力を人格と名づくるならば、神は宇宙の根[底].たる一大人格であり、宇宙は神の人格的発現ということとなる。

ここでいう人格とは人柄、品性等をいうものではなく、またキリスト教の如き世界を創造したいわゆる人格神ではない (Pr.S)。

神においては知即行、行即知であって、実在はただちに神の思想でありまた意志である。

神は知性と実在を併せもつものといえる (Pr.S)。

人格の要素として自覚、意志の自由、愛が言われている (イリングウォルス)。

自覚とは部分的意識体系が全意識の中心において統一せらるる場合に伴う現象である。

全意識体系とは普遍的なもの、また本来帰るべきものといえる (Pr.S)。

自覚は反省によって起こる、しかして、自己の反省とはかくのごとく意識の中心を求める作用である。自己とは意識の統一作用の外にない。

すべての意識は体系的であって、表象も決して孤独では起こらない、必ず何か

の体系に属している～1-3-2 (Pr.S)。

また、(1-3-8 ～より) 例えば、ここに一本のペンがある。これを見た瞬間は、ただ一個の現実である。これについて種々の連想が起こり、意識の中心が推移し・・・(中略)・・・この連想的意識がいよいよ独立の現実となった時が意志であり、兼ねてまた真にこれを知ったというのである (Pr.S)。

自分に意識があるのは、(種々の体系の) 衝突が(自己の) 反省(意識の中心を求むる作用)を通じて自己を意識するのである(意識の統一作用そのものである)。我々が内に省みて何だか自己という一種の感情がある如くに感ずるのは真の自己でない～2-9-5。

この統一あってかくのごとき意識を生ずるのである。我々はこのものとなって働くことはできるが、これを知ることはできぬ。

真の自覚は意識活動の上であって、知識反省の上にはない。

すべて我々の精神を支配する宇宙統一の念は、神の自己同一の意識である。

万物は神の統一によりて成立し、神においてはすべてが現実である。

神に反省なく(宇宙の統一であるが故に)、特別なる自己の意識はない(意識は統一されているが故に)。

すべてが自己であって、自己の外に物なきが故に自己の意識はないのである(4-3-6)。

哲学的問い：

赤ん坊に意識と分別ができて「悪」が発生した後、人はその悪よりさらにおおきな「善」を目指すとするれば、人はどのような態度で生きてゆけばよいのか。それとも、その悪は存在悪とみなして(それ以上悩まず、またそれを乗り越えようなどとは思はず)、宇宙の統一者なる神にすべてをゆだねればいいのか(助けてください…と祈るだけでいいのか)。